

# 大学生主導による英語活動

荒尾 浩子

平成23年度施行の小学校新学習指導要領では、外国語活動は、学級担任の教師、又は外国語活動を専門に担当する教師が指導計画を作成し、授業を実施することになっている。三重大学教育学部英語教育コースの学生は全員、中・高の英語科教員免許と小学校教諭免許を取得し卒業をすることから、将来、小学校教員になった際は、外国語活動での活躍、貢献が期待される。また中学校の英語教員になった場合も、小学校での英語活動との連結を意識した英語科教育を実施することは必須である。平成16年度から開始した三重大学英語教育コースのフレンドシップ事業は、毎年2年生の学生が中心となり、地域の小学生を三重大学に招き、大学生が主導となる英語活動を計画し実施してきた。平成20年度は5回目の取り組みを迎え、テーマは「季節行事」と設定し、他の文化の人々がどのような季節行事を大切に、楽しんでいるのかを英語を通して児童に体験し、理解させることを目的とした英語活動を実施した。

キーワード：フレンドシップ事業、英語活動、地域連携

## 1. 学生主導の英語活動の意義：過去の取り組みから

学生にとって、彼らが主導で英語活動を計画し実施することは、多くの労力と時間を費やさなくてはならならず、決して容易な課題ではない。しかし同時に、自分達が主導して英語活動を実施することから、彼らが学ぶことも多数あるということが過去の4回の取り組みで明らかになっている。

第一に、指導者（教師）が活動案に時間をかける重要性を学生は実感することができる。英語活動に限らず、どの科目の授業にも言えることであるが、活動案（授業案）の作成というものはある意味、実施そのものより重要である。つまりどのような英語教授スキル、英語力を持っていようと活動案が良質でなければ、外国語活動を成功させることはできない。児童の興味、関心を理解し、彼らの知的レベルにあった活動であると同時に英語の理解度も把握した上で、活動内容を組まなくてはならない。その活動の順序、流れも重要である。また児童が活動中、どのような反応を示し、それにどう対応していくか、学級集団内の一人ひとりの児童をどのように活動に引き込んでいくかなど、様々な要因を念頭に置いて活動案を作成しなくてはならない。作成後、実際に自分達でリハーサルをすることでさらに活動案の問題が浮き彫りになり、その解決のために再度、案を練る。この作業の繰り返しにより活動案はより具体化され洗練されていく。そして学生も活動案に自信を持ち、活動実施の最中、様々な場面でスムーズに対応し、児童を導くことができ

る。

第二に、学生が主体でやる上で、当然しなくてはならないのは、活動に適したオリジナルの教材、教具の準備である。学生主体のフレンドシップ事業では基本的に、オリジナルの活動にこだわってきた。よって市販の教材は、ほとんど用いない。例えば活動内に使う絵カード一枚を作成するにしても、手間のかかる作業である。これまでのフレンドシップでは約30人から40人の児童を対象に行ってきた。伸び伸びと活動できるように会場も通常の小学校の教室よりは大きめの部屋を使用する故、児童に彼らの英語の理解の助けとなる絵や写真を提示するには小さなものではいけない。児童の理解を高めるためには、イラストは自分達で大きくカラフルに描き、的確にその意味するところを伝えなくてはならない。その絵カードをホワイトボードに貼る場合はマグネットにするのか、テープで貼るのかそれとも複数の学生で四隅を支えるのか等によっても、準備物も変わってくる。スキットを見せて、児童に状況と共に言語の機能を示したい時も、小道具、セットの準備は不可欠である。ただ単にスキットを見せて楽しませるのではなく、的確に状況を描写し、理解の助けとなる小道具、セットが必要となる。ここで学生があれこれ議論を重ね、完成度の高い小道具やセットが生み出される。これらの細かな教材、教具の準備をしておいても、いざ活動を実施してみると予期せぬ問題に直面することもある。後の反省において「もっと絵をすっきりさせておくべきだった」、「マグネットをもっとたくさん用意しておくべきだった」「もっと厚手の紙を使えばよかった」など細かな点が色々でてくる。これらは、児童を目の前に実践して初めて出てくる、授業準備の「重箱の隅」のようなものだが、そこでさらに

学生の学びは深まる。過去の学生の事業後のレポートにも「これまで中学、高校で先生が授業に色々持ってくるのを当たり前のように見ていたけど本当にああった教材を準備するのは大変だと思った」という内容が多くあった。特に教育実習を経験する前の2年生にとっては授業を作りあげる大変さを実感する最初の機会である。とりわけ英語活動は、言葉による理解が限られているため、それを補う教材の使用は要となる。

第三に、英語活動が児童にもたらす効果を実感できる機会の一つとなるということである。英語活動については、必修化が公表される前から、様々な問題や不安の声が現場の教員からあがっていた。やや見切り発車的であるという見方がある中で、「総合学習」の時間内でここ10年、英語活動は9割以上の小学校で、その頻度や内容には違いはあれども何らか形で実施がされるようになった。そして現場の教員が英語活動を実施する中で、さらなる問題も指摘される一方で従来、予期していなかった英語活動が児童にもたらすポジティブな効果も多く気づかれるようになった。児童が他の教科や学校生活では十分にできていなかった自己表現の機会を増やしている。クラス内の児童が互いをより理解し尊重し合うようになり、新たな児童間のつながりを生み出し、クラスメートの関係を良好にするといった英語活動の副次的な効果が聞かれるようになった。また他教科では学力不足から決して授業内で活躍できる存在でなかった児童の中には、英語活動については適性が見受けられる者がおり、積極的な態度で活動をし、クラスの中で輝くことができる機会となりうるということも報告されている。「こういったことは」実際に児童を前に英語活動を行わなくては実感できるものではない。学生の場合は、担任教員や英語活動専任教員とは違い、常に学校生活の中で児童を間近でみているわけではないので、彼らの実態を完全に把握するのは難しい。しかしながら限られた活動時間内でも様々な児童の個性を観察することができるのが英語活動である。一生懸命に、不自由な外国語である英語を使用して伝えようとし、他の人の話に耳を傾け理解しようとする児童、同じ言葉をいうのにも声や動作で表現力豊かに発する児童、恥ずかしがっている仲間を励ます児童、何か言いたいんだけどわからなくて口ごもる児童、それをなんとか助けようとする児童・・・と各児童の個性やそれを取り巻く児童のつながり方、協力する集団の様子を目の当たりにする。学生の多くは自分自身も小学生時代に英語活動を経験したわけではないのでこの様子を目にするのは英語活動のある種、醍醐味のようなものを体験することとなる。学級担任となった場合、学級作りの一環としても英語活動が一役かうことを理解できる。

ここでは以上の3つのみを挙げてきたが、これらは学

生が活動後の反省会やレポート内で報告したことの部にすぎない。そしてこれらの経験が学生時代にあったとしても、実際に一教員として、自立して英語活動を実施する場合は、活動案、実施、クラス運営の上でさらなる現実的な困難に直面することは確かであろう。その時は、同僚に相談し、自ら教材研究をし、試行錯誤しながら乗り越えなくてはいけない。現時点では、仲間と一つの活動を作り上げる過程の中で、学生自身の協調性も高く求められる。将来、学校組織に勤務する教員を目指す者には、英語活動に関わる意見やアイデアを出し合いながら、一から何かを作り上げる協働作業をすること自体も必要な経験である。

## 2. 平成20年度の立案、準備

### 2.1 テーマ

英語教育コースとして5回目となるフレンドシップ事業はテーマを設定することから始まった。平成19年度は、「エコロジー」をテーマに英語活動を通してエコロジーを推進するという取り組みであった。現場の先生方の声は当然のこと、これまでのフレンドシップ事業を年度ごとに振り返った場合、単なるゲーム、遊びで終わらせたのでは、三重大まで出向いてまで英語活動をする意義が薄れる。1時間15分を使って、英語活動を組み立てるのに、一貫したテーマを設定することで、「初めに英語ありき」の英語のための英語活動にならないことを主眼とした。そこで学生間で話し合った結果、児童らが英語活動を通して異文化を学ぶことを目標としたいということになった。異文化といっても非常に幅広い。話し合いの中で、「祭り」を取り上げたい、また「異文化の子供達のホリデーシーズンに行く遊び」を伝えたい、という意見がでた。そこでテーマをしばらく、子供が楽しんで、題材も豊富である季節行事を紹介することに決まった。そこで設定されたテーマは「季節行事」である。このテーマの下、英語活動を行う目的は、英語活動を通して①異文化の人々がどのように季節行事を楽しんでいるか知る、②季節行事にはどのような意味があるのか知る、③季節行事に関係する英語表現、語彙を学ぶ、④ゲームや歌、コミュニケーション活動で英語の音声に慣れ親しみ、英語表現を学び、それを使う楽しさを経験することとした。

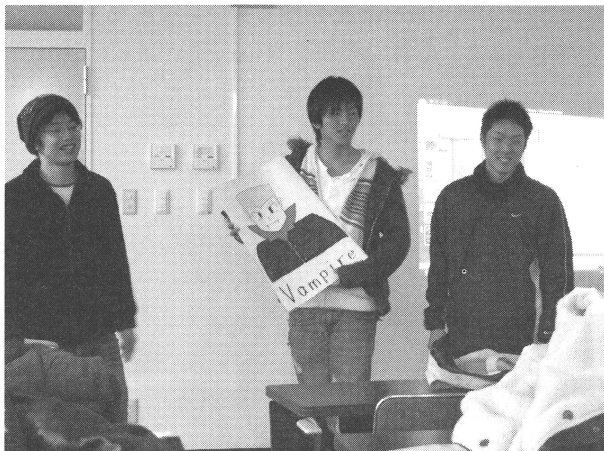
### 2.2 準備

テーマが設定された後、学生は5グループに別れ、各グループが約25分のパートを担当し、そこで実際に行う活動内容を話し合った。活動の初めの部分を1月からスタートし12月で終わるという流れの中で、色々な文化をとりあげ、子供に理解ができ、興味を持てる内容の

季節行事を選択し、英語活動にのせていく方法を話し合うことから始まった。活動内容が決まり次第、順次それに必要となる教材作りを始めると同時に、どのような指示、声かけ、説明をしていくのか、どのような動き方で児童を支援するのかといったことを試行錯誤の中で決めていった。

これらの話し合いを含めた準備期間である約6週間の後、すべての活動を一通り簡単にリハーサルした。

ここで他のグループの学生は、児童役として活動に参加し、お互いに助言し合う。実際の活動時を想定して、立ち位置やそれぞれの役割、教材の提示の仕方など確認していった。また活動の始めの挨拶、一つひとつの活動の繋ぎ方、活動の終わり方などどうするのかも打ち合わせた。



リハーサルの様子

### 3. 活動内容

#### 3.1 導入

初めに、簡単に学生全員から同時に児童に挨拶をした。ここで例年は、一人ずつ、名前を言って自己紹介をするパターンであるが、20年度の学生は、自己紹介はそれぞれの活動の中で取り入れることにした。

学生全員：Hello, everyone. Welcome to Mie University!

学生A Today, we'll learn seasonal events. Let's have fun.

学生も児童も共にやや緊張ぎみのため、少しぎこちない雰囲気であった。加えてここで唐突に用いた“seasonal events”という言葉が難しすぎたため、児童の理解の範囲を超えてしまったようだ。

#### 3.2 FUKUWARAI：正月

季節行事の一番は、1月の正月から始まった。日本の正月も一つの文化として英語活動の中で意識し、慣れ親しんでいる自文化の遊びを英語を使って改めて楽しませる意図である。正月には似つかわしくないトナカイ（の着ぐるみを着た学生）が登場した。トナカイは世界をめぐり季節ごとの行事を楽しんでいる設定であった。

学生A：Look at that? What is that?

学生B：I'm a reindeer. I'm ○○○○（学生の名前）

学生A：Hi, ○○○○. I'm ○○○○

この流れで他3人も自己紹介をした。

学生B：What are you doing?

学生C：We are playing a game.

学生D：Why don't you join us?

学生B：Of course. Let's play together.

学生E：What game do you play on New Year's Day?

学生B：FUKUWARAI!

学生全員：That's a good idea.

ここでデモンストレーションが始まった。まずは顔のパーツの英語での言い方を確認する。児童に“What's this?”と呼びかけながら、“Yes, this is an eyebrow.”と言い、すぐにリピートさせる。その後、学生の一人が目隠しをし、他の学生が、“Up, Up” “No, down, down. A little bit right” “O.K.” “Left! Left!”と指示の仕方を見せながら、一つの福笑いを完成させた。

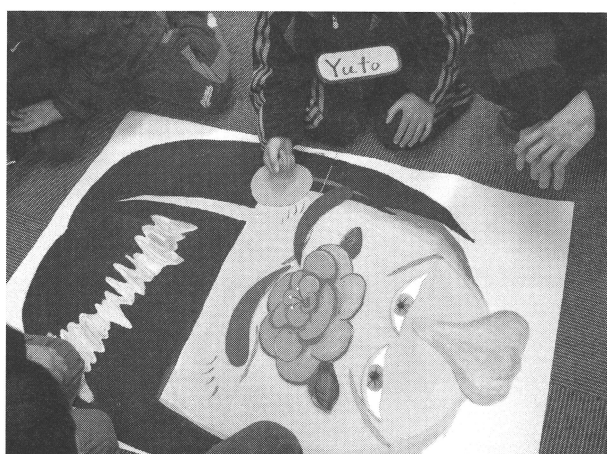


デモンストレーションを見せる学生

その後、児童は4、5人のグループに分かれて、学生が作成した様々な人種の人と思われる各グループ違う顔の福笑いをを行った。ここでグループに1、2人の学生が加わり、順番を決めたり、補助をしたりして活動を進行了せた。グループ内で一人の児童が目隠しをし、他の児童は、それに指示を与える。目隠しをした子供はパーツを取り“This is an eye.”とパーツの名前を確認した。その後、周りの仲間がデモと同様に英語で指示を出した。これを繰り返し、各グループの福笑いを完成させた。その後、各グループをサポートした学生が出来上がった、福笑いを全体に見せ、その成果を楽しんだ。非常に単純なゲームであったが、単純さゆえに学生も児童も共に説明から進行まですべて英語で実施できたのがよい点であった。



FUKUWARAI をする児童と学生



できあがった FUKUWARAI

### 3.3 Egg Roll: Easter

季節は春である。アメリカのイースターを紹介し、子供が楽しむゲームを英語で実施した。トナカイが再び登場し、担当の学生らに迎えられる。

学生 A : Welcome to America.

学生 B : We're celebrating Easter.

学生 C : Easter is Christian Holiday. Do you know Jesus Christ?

児童 : Yes, of course.

間髪入れずにこの応答ができるところにこれまでの小学校における英語活動の成果がうかがえる。その後、イースターがキリストの復活を祝うものであるといった内容が日本語で簡単に説明された。ここで日本語を使用しなくてはならないのが英語活動で異文化知識を詳細に伝達する際のジレンマであった。しかし工夫次第では、イラストなどを用いて、すべて英語で理解させることもできたと思われる。その後、ピンポン球に柄や色をつけて作りタマゴに見立てたものを使用して Egg Roll というイースターの遊びをした。

学生 A : What's inside?

学生 B : These eggs are presents for children.

学生 A : Oh, I want it.

学生 C : Sure, but you have to try Egg Roll. It is a simple game. Do you know colors in English?

学生 A : No, I don't.

学生 C : Let's learn colors.

パワーポイントで色の画面を見ながら、red, yellow, blue, green, purple, brown, black, orange... と代表的な色を学生が発音し、それを児童が繰り返す。児童は色については英語活動の初期段階ですでに馴染みがあるためやや簡単すぎるくらいであるが、ここではきちんと発音させることを重視した。そして Egg Roll のデモが見せられた。ゲームの方法は次のようであった。児童はグループに分かれる。各グループの児童一人がスプーンを持って 5 メートルほど先に立っている学生のほうへ歩いていく。そこで学生は "What color is this?" と折り紙の色を見せながら尋ねる。そこでスプーンをもって歩いてきた児童が正しく "It is blue." と応答できると "That's right. It is blue. Here you are." と袋の中からきれいにデザインされたピンポン球を一つ取って手渡される。そこで受け取ったほうは、"Thank you." と言い、スプーンに球をのせて、反対側にいる自分のグループメンバーのところに行き、スプーンを渡す。綺麗なピンポン球は今回の児童へのプレゼントとなる。スプーンを受け取ったらリレー方式にまた学生のところいき、同じやりとりをする。



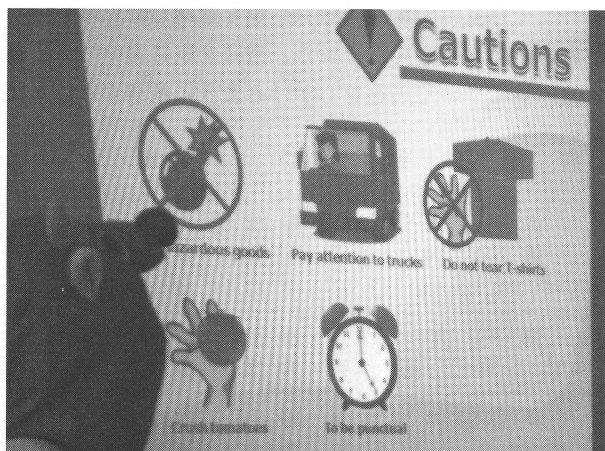
Egg Roll を楽しむ児童と学生

これらの児童と学生のやりとりの中で大切にしたのは、単純にスピードや球を落とさないことを重視するのではなく、正しく応答ができること、またちゃんと球をもらったら "Thank you." とお礼を言えることであった。これをしてしない限り子供はプレゼントであるピンポン球をもらって次の人にスプーンを渡さないよう、各地点で学生が確認し、言い忘れていた場合はきちんと言うように促した。

### 3.4 クイズ : Spanish Summer Festival

季節は夏である。活動に一息いれる意味も含めて、静かな活動を取り入れた。パワーポイント上に出された 3

つのお祭りの写真を見せクイズを出した。一つ目は、ブラジルの Carnival、二つ目はベルギーの Cat Festival、三つ目は、スペインの Tomato Festival である。30 秒与えて、どれがスペインの祭りか考える時間を与えた。その後、どれが正解であると思ったか一つずつ、手を挙げさせた。児童は選択肢である三つの写真それぞれに、ほぼ均等に手を挙げ、正解である三つ目に手を挙げた児童は、正解が伝えられると「やったあ」と喜びの声を上げていた。その後、Tomato Festival の説明を行った。学生自身も知識がなく調べた末、イラストと共に、祭りの由来や、祭りで禁止されている事項などの内容を、児童にも大人にも興味深い内容であった。

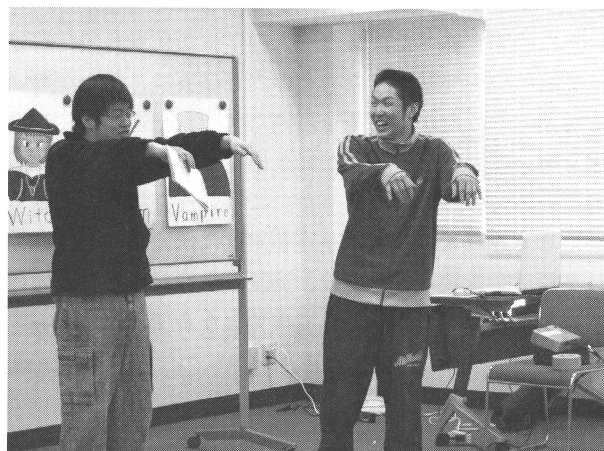


パワーポイントでの説明

### 3.5 ジェスチャーゲーム：Halloween

季節は秋の設定である。アメリカのハロウィーンを紹介する。ハロウィーンで子供達は、何かに扮装し、大人に "Trick or Treat" と言って、お菓子をもらうという内容を英語で伝えた。この説明を、児童は一言一句理解をしたわけではないと思われるが、日本でのハロウィーンの浸透度も助けとなって、ほぼ概要は理解ができている様子であった。その後、ハロウィーンに関する 8 個の言葉である bat, ghost, wand, wizard, mummy, witch, broom, vampire を絵カードとフラッシュカードで提示し、児童に正しい発音と意味をリピートして覚えさせた。そして同時に、その言葉にあったジェスチャーを見せ、児童にも真似させた。その後、児童を立たせて、学生が絵カードを指し発音をし、それにあったジェスチャーを児童にさせて、きちんとジェスチャーと言言葉が頭に入っているかを確認した。その後ゲームの説明を行った。グループに分かれ、先頭の児童は前に出て、他のメンバーの背後に示される字で書かれたフラッシュカードにあったジェスチャーをする。それを見てグループの次の列の児童が、英語でその言葉言う。絵カードは前のホワイトボードに掲示されたままなのでそれを見て、何があったか思い出すことができる。しかし振り返ってジェスチャーしている人が見ているフラッシュカードを見てはいけない。

その児童がわからない時は、同じグループの仲間は教えてもよい。答えることができたなら、今度は答えた児童がジェスチャーを見せる番となり、次の児童が英語を言う、という過程を繰り返す。学生は正しく児童が言うことができているかを各グループに付き添って確認する。



ジェスチャーを見せる学生

このゲームを実際に児童にやらせた後の反省点として、2つの点で少し難易度が高いことが発覚した。一つ目は、一気に 8 個の日常的に使用されない英語の言葉を提示した点である。絵と字により理解はできるが即座にその言葉を出力するのは児童によっては難しい様子であった。二つ目としてジェスチャーをする児童は絵ではなくアルファベットで書かれたフラッシュカードを認識し、理解しなくてはならなかった。馴染みのある単語であれば問題はないが、初めて聞いたばかりの単語を文字で認識するのは、文字と音の一致が不完全な児童にとっては容易ではなかった。そこで児童が文字を認識できずに困っている様子の際は学生が横でサポートすることになった。

### 3.6 クリスマスソング：Christmas

最後の活動は冬である。活動の中で、学生のストーリー展開としてトナカイは正月から様々な季節行事に参加してきたことになっていた。ついにサンタと出会えたトナカイが、ハイタッチでサンタと喜び合うという設定であった。これを見て、初めて児童は季節行事の案内役をしてきたトナカイの意味を理解したようであった。そしてサンタ役の学生がバイオリンを取り出し、クリスマスソングである "I wish you a Merry Christmas" を歌おうと提案した。歌の歌詞はパワーポイントで提示された。バイオリン演奏と共に全員で元気に歌い、活動のしめとなった。計画の段階でこの事業の実施は 1 月後半であることから、クリスマスソングを用いるのは季節はずれではないかという意見もあったが、季節ごとの行事を取り上げたいという趣旨を優先して、全体の流れからやはり歌うことになった。12 月の実施であれば、尚いっそう

活きる活動であった。

### 3.7 Good-bye

すべての活動を終え、最後に学生一人ひとりが一日の活動や英語について、わかりやすい英語で“I had a very good time. Thank you.”や“Your English was very good.”といった感想を述べた。また一人の学生が代表して、自分と英語について話をした。その内容は実は、英語が嫌いな時期もあったが、英語を用いたゲームや歌を楽しむ経験を持ってからは、英語が好きになって今は英語を楽しんでいるというものであった。こういった実際に英語を学習してきた人のヒストリーを児童に伝えることは、今後英語活動を続け、その後、英語が学習対象となっていく過程においての刺激として重要となるであろう。



握手で送り出す学生と会場を去る児童

であった。

指導者としてさらに欲を言うなら、5年生という高学年の児童が、単に季節行事についての知識を与えられ、事実を伝えられ、英語に触れるだけでなく、自分自身でテーマについて考え、新しい世界観や意見を持つことを促す活動を組み込むことができればより充実したものになっていたであろう。今回の活動は、低学年、中学年を対象とする英語活動としても、英語による説明や語彙のインプットの量さえ調節すれば、そのまま使うことができる内容であった。その意味で今回の英語活動は、5年生にとって知的好奇心を十分に満たすことができたかという疑問は残る。今後は、テーマ設定時に、学生に対して、これまで以上に児童の発達レベルを意識した思考を促す活動を意識する必要性を説き、常に念頭に置いて、活動を組み立てていくことを心がけるように指導することに努めたい。

## 4. 終わりに

20年度の学生主導の英語活動は、無事終了した。毎年度、同様、終了した直後は、客観的に自分達の活動を見ることができない。しかし後日の報告で児童たちや引率された先生方にも好評であったことが知らされ、学生らは達成感を覚えることができた。学生からの活動内容に関しての大まかな反省点は以下である。

- ①文字を手がかりとする一部の活動が、児童の理解の負担となったおそれがあったこと。
- ②会場の大きさが児童の人数に対して小さかったこと。
- ③異文化の季節行事を取り上げる中で、結果的にスペインと日本以外はアメリカ文化に偏ってしまったこと。
- ④季節行事の流れと話の展開を重視したため季節はずれな歌を歌うことになった。

その他、細かな点を指摘すれば枚挙にいとまがないのが事実であるが、全体的には、テーマに基づき関連した活動をスムーズに進行でき、教材、教具の準備が良く整い、演出の点でも工夫が凝らされていた。また児童が英語を聞くだけでなく、話す機会を多く設け参加しやすい活動